

ペペにアルツーロ サクリスタンを思い出させた。そうだ彼に電話をしよう。マルベージュの上流社会の全ての人と、接触するのを助けてもらうことができる。彼に電話を掛けた。秘書が出て彼に繋ぐ迄少し待つ間、声楽家の知られている歌が鳴っている。“良い広報担当者だな、彼は”とペペは考えた。

—ペペー 電話の向こうでアルツーロが言った。

—アルツーロ、元気かい？君に願い事があって電話をしたんだ。

—言ってくれ。

—マラベージャに或る仕事の問題で行かなくてはならないのだよ。クラウドイオの友達たちと接触したいのだ、この人達は全て金持ちで、美人、君達良く知っている間柄だろう...

—君の皮肉は相変わらずだね。

—皮肉ではないだろう、君たちは成功者だ。私は一介の私立探偵だ。私を助けてくれるのは迷惑でないかな？

—いいや、そんなことはかまわないよ。すぐに彼らの住所と電話番号を送るよ。そして彼等に電話をして言って置くよ、君が行ったら会い、迎え入れるようにとね...

—本当のところ、いつ行くと考えているのかね？

—いやまだはっきりしていない、多分来週だろう。

—なんと素晴らしい、何故なら、7月3日、クラウドイオの誕生パーティーが彼の家であるのだ。君を私達は招待し、そこで仲間たちに会えるよう取り計らうことができる。

—どうかね？

—素晴らしい。ではご招待を受けるよ。2名でよろしく。

—うん、すぐに私の秘書に言って置くよ。君に送るようにね。